

## 引用文獻

1) Pumpelly, R., Smith. Contr. Knowl. **15**: 79-108 (1866). 2) Brun, J. & Tempère, J., Diatomées Fossiles du Japon (1889). 3) Jimbo, K., Exp. Text Geol. Map Hokkaido: 49 (1890). 4) 西山正吾, 北海道鉱床調査報文 (1891). 5) Pantocsek, J., Beitr. Kennt. Foss. Bacill. Ungarns **3** (1892, 2 Aufl. 1903.). 6) 石川貞治, 北海道府地質調査鉱物調査第二報文 (1896). 7) 矢部長克, 地質雑, No. 128: 187-194 (1904). 8) Fricke, F. in A. Schmidt, Atlas Diat. pl. 247, figs. 1,2 (1904). 9) 佐藤伝蔵, 地調報, **31**: 1-42 (1911). 10) ———, 地質雑, **19**: 1-14 (1912). 11) ———, 工業原鉱調報, **12**: 2 (1922). 12) Hustedt, F., Abh. Naturw. Bremen (Mills, Index Diat.: 26 による). 13) ———, Arch. Hydrob. **40**, (4): 867-973 (1945). 14) 地質調査所, 日本地質鉱産誌: 420 (1932). 15) 長尾巧・佐々保雄, 地質雑, **40**: 555 (1934); **41**: 47 (1935). 16) 江本義数, 植研, **12**: 507-516, 556-561 (1936). 17) Cleve-Euler, Bot. Not.: 143-163 (1938). 18) 北海道工業試験場, 北海道地質図 (1940). 19) 河嶋千尋, 繁協雑, **49**: 212, 354-355 (1941); **51**: 128, 132 (1943). 20) 市川渡, 地質雑, No. 675-676: 13-21 (1950). 21) ———, 日本鉱産誌 B, **4**: 88-128 (1954). 22) Okuno, H., Atlas Foss. Diat. Japan (1952). 23) ———, 科学, **14**: 307 (1944). 24) ———, Trans. Proc. Palaeont. Soc. Jap. N. S. No. **14**: 143 (1954). 25) Foged, N., Medd. Greenland, **147** (10): 1-86 (1953). 26) Lavrenko, P., Fresh-water Diatoms (1954).

□本田正次：植物文化財——日本の天然記念物・植物 東京大学理学部植物学教室内、  
本田正次教授還暦記念会発行、三省堂 1957年12月刊 439ページ

著者は約10年前から天然記念物に指定されている植物を分類学の体系順に組みかえ解説を加えた原稿を準備しておられたが、昭和32年3月東京大学教授を定年退職せられるにあたり、本田教授還暦記念会はその事業の一端として、著者に乞うてこれを出版させていたゞくこととした。本書は植物群でまとめられているため、たとえばケヤキは巨木または名木として指定されたものが23件、並木が1件あるが、その様子を一見してわかるなど、まことに便利である。また古く指定されたものの現況なども本書によってはじめて知ることができる。著者のように日本をくまなく歩いておられる方は少ないだろう。簡単な記事の中にもこれら植物に親しまれたありさまがうかゞえて楽しい。ところどころには写真が添えられてある。拝見するうちにときどき、昔おとづれた木に出くわすのも楽しいし、これからは本書を道しるべにこれらの巨木・名木をおとづれたいと樂しくなる。著者は昭和32年5月、東京大学名譽教授になられたが、ますますご元気に活躍のこととて、日本の草木は安心してその生存権を主張できるのである。なお本書は非売品であるが特に希望の方は井上書店から480円で入手できる。

M. Honda: Natural Monuments of Our Native Plants (in Japanese) 439 pp. (1957)  
Sanseido Co., Tokyo. (木村陽二郎)